

Title	福澤文明塾の羽田先生： 福澤諭吉記念文明塾の立役者羽田先生への感謝を込めて
Sub Title	Professor Hada and Fukuzawa civilization institute (Bunmeijuku)
Author	田村, 次郎(Tamura, Jiro) 阿部, 晴美(Abe, Harumi) 赤羽, 裕子(Akahane, Yuko) 志賀, 晶子(Shiga, Shoko) 針谷, 和昌(Hariya, Kazuyoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.58 (2019.) ,p.239- 252
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	羽田功教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Isao Hada 退職記念に寄せて = Zu Ehren Prof. Isao Hada
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20190331-0239

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤文明塾の羽田先生

——福澤諭吉記念文明塾の立役者 羽田先生への感謝を込めて——

田 村 次 朗

羽田先生への感謝の気持ちは、言葉には表せないほどである。

福澤文明塾は、慶應義塾の150周年記念事業として、「未来への先導」をキーワードに、新しいリーダーシップ教育を試みる大きな実験であった。リーダーシップ関連の授業については私なりの経験でイメージはできていたが、リーダーシップ教育には教養が重要であるという認識のもと、教養教育についても形にする必要性があった。この、リーダーシップ教育に欠かせないベーシック・ナレッジのコーディネーターにどのような人がなるのかが、この塾の成功のための決定的な要素と思われた。しかし、慶應大学において、教養教育と専門教育はそれぞれ異なる世界があり、教員同士の連携が必ずしもできているわけではなく、私は不安を感じていた。

そのような中で、福澤文明塾を立ち上げる際に、運営委員、そしてコーディネーターとして選ばれたのが、経済学部の羽田先生である。不安を抱いてのスタートだったが、羽田先生との共同作業が始まり作業が進むにつれ、私は、「この方と組めば成功の道筋は必ずやつくれる」と確信を強めた。

教養を専門とする方には、それぞれの世界を深く掘り下げることができる方が多くても、その幅広いそれぞれの世界を体系立てて整理できる人は日本では数少ない。しかし、羽田先生とプログラムをつくると、単なる知

識偏重の教養教育にとどまらず、何のために人は教養が必要なのかを気づかせてくれるようなものになった。私にとって、まさにイメージしていた通りの最適なコーディネーターが羽田先生であった。

そのおかげで、リーダーシップ力というコミュニケーション能力のみに偏りがちな文明塾生に、教養という底力を授け、車の両輪のように機能する真のリーダーシップ基礎教育を行うことができた。これは目に見えて結果としてあらわれた。文明塾の修了生は、文明塾に入ると必ず力がつくと宣伝してくれた。おかげで文明塾は常に応募者が多かったが、その価値のわかる人たちが集まるため、選抜に苦勞することもなく、最高の教育の場になった。その証として、当初数年間の記念事業と想定された文明塾が、10年間という、大学側がリミットだからこれ以上は続けられないというところまで続いたのである。

このプログラムの成功はひとえに、世の中によくある、リーダーシップ力という一面から教えるのではなく、リーダーシップ力と教養のバランスで教えることによるものだと思う。羽田先生と出会い、お力添えをいただくことがなければ、文明塾の成功はなかったであろう。

慶應義塾のリベラルアーツの伝統は、福澤諭吉がアメリカから学び持ち帰ったものであり、私はかねてからそれを実践すべきであると思っていた。羽田先生はまさにその実現をしてくれる最適な人物であり、慶應義塾の宝と言えるのではないだろうか。退職されるのは残念でならないが、その多大な功績と尊い精神が慶應義塾で引き継がれていくことを強く期待して、羽田先生への感謝の言葉としたい。

*

人間の弱さと強さの両方を認めてくださる羽田先生は、多面性と専門性を併せ持ちつつ、いつもわれわれを可能性ある未来に導いて下さいます。そんな日頃の先生への感謝の気持ちを胸に、そして今回この様な機会を与えてくださった日吉紀要刊行委員会の皆様にも心より感謝しつつ、慶應義

塾大学創立 150 周年記念事業・福澤諭吉記念文明塾にて羽田先生にお世話になった修了生や元事務局員の有志 4 名が、それぞれの羽田先生への想いを綴りました。

*

“教養” の人

阿部 晴美

羽田先生について書かせていただくには、私のとある失敗についての話から始めなければなりません。

羽田先生とは、2010 年に私が慶應義塾主催の福澤諭吉記念文明塾で学んだ際に、ご縁をいただきました。羽田先生は、慶應義塾大学教養研究センター所長のご経験より、2007 年から文明塾の立ち上げに参画され、2013 年までプログラムコーディネーターをされていました。

文明塾修了後、しばらく経って、文明塾修了生向けのウェブサイトには羽田先生のインタビュー記事を掲載したいと思立ち、羽田先生にご依頼して快くお引き受けいただき、忙しい時間を割いて、私のインタビューに応じていただきました。

当然のことながら、インタビューは、それほど時間をおかずに原稿に書き起こされなければなりません。ところが、とても楽しく充実したインタビューだったにもかかわらず、私の怠慢により、なんと一年 (!) が経過してしまいました。そして先生のインタビューを録音していた IC レコーダーが壊れ、当時の音源がすべて消えてしまったことに気が付きました。

取り返しのつかないことをしてしまったと思いました。お忙しい中無理を言ってお引き受けいただいたにもかかわらず、何ということをしてしまったのだろうと、自分の怠慢とふがいなさに、心も体も縮み上がりそうでした。

迷った末に、私は、先生にすべてをお伝えし、お詫び申し上げ、あつかましくも、できることならもう一度インタビューをさせていただけないか、ご連絡を差し上げることにしました。呆れかえってお返事をいただけなくても仕方がないと思いました。

緊張しながらメールを送信して2時間後、羽田先生から次のようなメールが届きました。

メールを拝読しつつ、大昔、ミュンヘン留学時代のことを思い出しました。

当時、本棚が必要になり、郊外に大規模店舗を構える IKEA に出かけたことがあります。

基本的に自分で組み立てるのが IKEA 方式なので、適当なセットを買い入れ、下宿に帰って組み立て始めました。ところが、パーツに不良品が混じっていたために完成できず、仕方なく取り換えに再度出向きました。「クレーム対応ルーム」とでもいうのでしょうか、巨大なスペースに案内されたのですが、そこに入ったとたん、まず目に入ったのが、多数の窓口の上に掲げられた、これまた巨大なプレートでした。「人間に過ちはつきものです」

これを見たとたん、思わず大笑いをしてしまいました。やられた！
といった感じです。

どうか、今回のこと、気にしないでください。私にも似たような経験があります。

それに、あの時のことは、私にとっても今もとても楽しい記憶として脳裏に刻まれています。ということで、前のようなお話ができるかどうかは心もとない限りですが、もう一度お話をきいていただけるのなら、喜んでお引き受けします。

なんという優しさとウィットにあふれたお返事かと、このメールを拝読したときのことは今でも忘れません。

インタビューでは、先生の人生の転換点となったさまざまな出来事、先生が考える教養とは何かということ、“言葉”に対する想いなど、先生のお人柄がにじみ出る含蓄深いお話をたくさんお伺いすることができました。それをもとに羽田先生の魅力を語ることもできるのですが、でも私は、いただいたこのメールに、説明不要の、羽田先生のお人柄がつまっていると思います。

“教養”とは何か。私にはそれを定義する力も素養もないけれど、それを考えるとき、私は羽田先生のことを思います。知と経験を基盤にし、人と優しくつながる人、それが羽田先生であり、そのような方が知の集結地であり発信地である大学で長くご活躍されたことは本当に大学にとって宝であったと思います。

いただいたメールとその後のインタビューは、今でも私の大切な宝物です。

*

羽田先生のおもいで

赤羽 裕子

だれしもそうだが、人間というものは、正面から見ただけではわからない。裏側だけでなく、斜めから、あるいは下から見ても、見る方向や視点によって、人の見え方は違うものだ。茶の湯の儀式のように、茶器をめでその周囲全体を見回すと、不思議な塗りがあったり、緑のお茶をいれるとその香りでいままで見ていたその器の景色が変化するように、人も受け入れる何かによって変わっていく。

羽田先生もたくさんの彩をもつ、懐の深い不思議な器だと、私は思う。

紺

慶應義塾大学の150周年記念事業の一環で施行されたプログラムが、半ばに入り、いよいよプログラムの内容も充実し熟成してきたころ、私は羽田先生と出会った。ベーシックナレッジと題したそのプログラムには、リーダーとしての多面的な視点を養うために、様々な分野の講師のレクチャーを受け議論が生まれる場であった。毎回奥が深く、そのたびごとに心を揺さぶられた。教養という言葉以上に、生きるという人の根幹の部分を探求し、どうあるべきか、またはどう生きるかといった、力強い投げかけを毎回先生から問いかけられた。観世流坂井職分家当主 坂井音重さんや、昨年亡くなられた俳人の金子兜太さんなど、教養という範囲をこえて、その人の生き方そのものに心を震わせられるセッションの数々であった。

なかでも私にとって一番印象深かったテーマは「開く」「開かれる」であった。人は開くことから、他を受け入れその瞬間から、またちがったものが見える。開かれることは怖いけれど、開かれたその先には、思いもかけない希望や学び、発見がある。その希望を人はわすれないからこそ、生きることが怖くないのだと、ベーシックナレッジのプログラムから知った。

日本人として自然と共生する意味、日本人の伝統文化が引き継がれ受け継がれる意味、新しいものと融合しながら、あるいは変容しながらも、その根幹にある何かを決して忘れない意味。それを先生のプログラムから知ることができた。その教えはある意味、慶應義塾の旗のような、ベーシックな紺色の部分のように思えた。

白

先生が教養研究センターの時から実行されていた庄内セミナーに参加した。庄内セミナーでは、庄内の自然を舞台に、「生命」について考える様々な経験をする場である。折しも、参加する数年前に伴侶の死を経験し、人生というものは、自分が選択して自らの足で切り開いていくものだと思っていたが、実はそうでもないのではないか、と気づきはじめていた

時だった。様々な修験を通し、庄内の温かみ深い環境に抱かれ、私は私なりの生命への理を旅から得ることができた。

先生と一緒に白装束を着て、滝に打たれ、南蛮いぶしと一緒に涙を流し、夜は生命を考える講義に頭をフル回転させて、自分の生命の過程を振り返る。最後はそれぞれが自分の考えをつまみに、大いに飲み笑う。そんなひと時を先生とともに過ごせたことで、私は、人生とは、そもそも思い通りにならないに決まっているのだとしたら、普通にこだわることなく、おもいっきり楽しんでしまったほうがいいのかもかもしれないと、このセミナーを通してはっきりわかったと感じた。そんな貴重な経験を用意してくださった、羽田先生が白装束に身をつつみ果敢に修験にとりくむ姿を、私はわすれられない。

赤

慶應義塾高校校長としての羽田先生は、また違った色をまとっていらっしゃるように思えた。ある日、先生が高校の校長になられた。ちょうど我が家には、なかなか学校に思うように通えない長男をかかえ、先生に何度か相談に乗っていただいたことを思い出す。先生は、高校生は蝶になる前のさなぎのような存在だと、教えてくださった。だからこそ、親はその間に受けている様々な彼の人生の試練や挑戦を、じっと待って、いつか蝶になることをそっと見守り、待ちなさいと私に教えてくださった。その言葉を私は今でも大切にしている。親ができることは、子の成長とともに変化する。いつまでも親が守ることはできない。だからこそ、親は親らしく、子は子らしく自分の人生を歩んでいくことこそが大切なのだと感じた。

高校始業式で校長の話が長いと、2,000人の高校生に拍手されるらしいんだと苦笑いをうかべられていたことを思い出す。

たくさんのさなぎを見事に大きな蝶にはばたかせるためのたくさんの機会を、若き10代の青年たちにむけて発信し、奮闘されていらしたご様子は、若者のエネルギーとともに燃える赤い色に、私には思えた。

緑

羽田先生のもう一つの色は緑色だ。ご自身の健康を考え、合気道をはじめられ、華麗に右へ左へと立ち回るご様子は、躍動感あふれる、森に生い茂る葉のような緑色だった。羽田先生の師である合気道師範である多田宏先生に先生を通じてお目にかかれたことも、大変私にとってかけがえのない機会であった。昨今アンチエイジングはだれにとっても関心深いテーマだ。「老いる」ということは、ついつい、いかに年をとらないか、若くあるかという方向に考えてしまう。しかし、多田先生は「老いる」ということは、徐々に徐々に自然になだらかになっていくことであるとおっしゃった。自然にあらがわず、ただその流れに身を任せ、柳のように風の吹く方向性に倒れこんだり、倒れこんだ後にそのままとある場所へもどったり。流れの中であちらへこちらへと動いていく。羽田先生が考える人生の様は、合気道の呼吸に表れているように感じた。吸ってはいて、地球とともに、自然のエネルギーを感じながら生きる。羽田先生の静と動は、風のなかで揺れている葉のようで、時には雄々しい、時にはゆるやかな緑色にうつった。

さて、羽田先生の姿から、私は紺・白・赤・緑と4つの彩を感じる。先生とお会いしたのは6年前なのでその間だけでも4つの側面を見せていただいたこととなる。

先生の長きにわたるアカデミックな世界のなかでのご活躍の中には、先生のまだちがった横顔をご存知の方も大勢いらっしゃると思う。

私は羽田先生のおかげで、人が生きる本質を、あまり堅苦しくとらえる必要はないことを教えていただいたような思いがしている。人は運命にはあらがえないけれど、今日を精一杯思い切って生きていく、そして、誰と比べることでもなく、自分にしかできないことをただひたすら信じてやること、その二つのことを先生から教えていただいたと思っている。

今回、先生のご退職の知らせを受け、大変残念な想いでいっぱいであるが、それと同時に、今度は先生がどんな彩を今後放つのか楽しみでならな

い。何かを離れることは、また新たな出発にすぎない。先生の幅広いご経験を活かし、まだ存じあげない隠れた先生の側面がますます彩り豊かにこれから一層輝かれることを、信じてやまない。

羽田先生、本当にさまざまな教えをありがとうございました。そして、これからもどうぞよろしく願いいたします。

そうそう、先生の大事な色を忘れていた。

一緒に大好きなお酒を愉しんで、語り合う色、いわば、虹色だろうか？先生とまたぜひ、楽しい宴をご一緒させてくださいね！

*

憧れの教養人

志賀 晶子

羽田先生との出会い……

慶應義塾大学創立150周年記念に設立された「福澤諭吉記念文明塾」のコーディネーターを羽田先生が務めていらしたところへ、2013年4月に私が入塾の機会を得、3ヶ月の間、教養とリーダーシップを学ぶプログラムに参加させて頂きました。プログラム修了後も、先生のお人柄に惹かれた修了生たちと、先生を囲む会などで交流させて頂いております。今回、先生のご退職にあたり寄稿させて頂けるとは、驚きつつも大変光栄に感じております。

おこがましくも羽田先生について私が語ろうとする時、思い浮かぶ言葉は、「教養」と「人間」です。

私の中で、羽田先生＝「教養」です。

「教養」は、単なる知識ではなく、社会・文化と関わり体系的な知識を身につけていく過程で得られるものの見方や価値観、また、そうしたもの

を獲得しているからこそその心の豊さです。私がか社勤めをしながらも文明塾に参加したいと思った理由は、他のビジネススクール等とは違って、教養の大切さを謳っていたからです。そして、文明塾の理念である「教養」を体現していたのが羽田先生でした。

文明塾においては、私のようなミーハーが思い浮かべる茶道、和歌、日本画などはもちろんのこと、身体と結びついた能楽や合気道にも、羽田先生コーディネートのもと、一流の実践者による講義や体験参加によって触れることができ、大変贅沢なプログラムとなっていました。どのコンテンツにあたって、羽田先生が、その文化や実践者への尊敬と愛情を持っていらっしやることが伝わってきました（あとになって、先生のご専門が、プログラムで紹介されたどのコンテンツとも違うドイツ文学だと知って、さらに驚きました）。

知識や体験の蓄積は、ある閾値を超えると急激にシナプス効果が発展していくものだと想像します。「あの人は引き出しが多い」などと言いますが、真の「教養人」は、どの引き出しを開け閉めしても、巨大な収納ダンス全体が脈動して光を放つような、そのような憧れを私は持っています。

私は、大人になってから知り合った方々に対しては、基本的に、肩書きではなく「〇〇さん」と呼ぶ方が多く違和感がありません。羽田先生は、自然に「先生」と呼んでしまう、数少ない存在です。

私の中で、羽田先生＝「人間」です。

「教養人」というと、ともすれば、人間社会のしがらみや泥臭い悩みとは一線を画しているような幻想を持ってしまうのですが、私の羽田先生への印象は、むしろ、「え？ そんなに？」というほど人間くさい方だというものです（ちなみに、天人たちの住む月では苦しみも感動もないが、人間たちの住む地球では、悲しみも含めて彩りに満ちている……とかぐや姫も言っていました。教養が心の豊かさであるならば、本来、教養は人間くさいものであって当たり前かもしれません）。

先生は、なにしろフランクでいらっしゃいます。私のようなミーハーに對しても、「その程度では本質はわからないよ」的な線を引くようなことはなさいません。お話をしている、知識というよりも先生の体験やお気持ちをもっとすぐ語ってくださるので、すさまじい見識レベルの差を忘れて、こちらもおしゃべりを自然と楽しめてしまうのです。先生は決してなさらないでしょうが、知識や蘊蓄をひけらかして下さっても、こちらの耳学問になっていいのに……とたまに思ってしまうくらいです。

これまで、限られた機会の中ではありましたが、先生の学生時代の勉強や音楽の話、ご家族の話、学校教育者としての話、などなど、ハートフルで楽しいお話を沢山聞かせて頂きました。そういったお話をされる時の、知的で情熱的なご様子が、人を惹きつけるのだと思います。

とある懇親会の帰り、駅までご一緒させて頂いたことがあります。文明塾でせっかく一流の教養に触れる機会を頂きながら、深める努力を怠って相変わらずミーハーでいることを、当時、私は少しうしろめたく思っていました。それに対して先生は、教養に触れたい、という好奇心はとても大切だということ、「志賀さんの好奇心はセンスがよい」という（ようなかんじの）ことを言ってくださいました。これはものすごく嬉しかったので、秘かに自慢に思っています。ただし、この時は、気のおけないメンバーと痛飲したあとだったため、この素敵なお言葉も、そのあと駅の階段をスローモーションで落ちていった先生のお姿も、現実のものだったのかどうか、定かではないのです。

これまでの文明塾や慶應義塾大学でのご指導、ご厚意に深く感謝するとともに、これからも折に触れ、私の憧れの「教養人」としておつきあいくださいますよう、お願い申し上げます。

教養・頭と体・覚悟

針谷 和昌

教養

慶應義塾大学創立150周年記念事業・福澤諭吉記念文明塾の第1期は、2009年4月に始まり、ほどなくして文明塾のプログラムコーディネーターとしての羽田先生にお会いしました。学問の世界に生きるともソフトな方、そして文明塾という学びの場で大切にされている「教養」という言葉が、先生ご自身からも存分に漂ってくるというのが第一印象でした。

そもそもその文明塾って何なんだ？という方も多いと思いますので、前掲の文明塾3期生阿部さんの先生へのインタビュー記事で、先生が文明塾について語っていらっしゃる部分をご紹介します（website BUNMEDIA 2016年6月より）。

いわゆる私塾としての原点に戻るとのこと自体は面白いだろうと思いました。そして、慶應義塾がこれだけ大きな組織になった中で、せいぜい何十人かが集まって、そこで私塾の原点を意識しながら新しいことをやっていくというのはチャレンジングだと思いました。あともうひとつは、いわゆるリーダーを作るという時に、一番僕が引っ掛かっていたのは、やはりリーダーにとって広い意味での教養とは一体何だろうかということの議論が、日本の場合はものすごく弱いということでした。もし、ここで少しでも自分なりのリーダーにとっての教養論が実験的に展開できるのであれば、やってみる価値があると思いました。多分そのふたつを最初に感じていました。

[……] 文明塾にはいろいろなキャリアの人が集まってきます。年齢差だとか、学生か社会人かということだけではなくて、例えば何かひ

とつのキーワードを置いたとしても、その時点で既に文明塾生の見る角度というのはバラバラでしょう。[……] そこで起こる化学反応にはいろいろな可能性が出てくるので、「教養」という言葉は「専門」との対義語では決してない。そういった意味でいくと専門も教養なんです。そういった広い意味でのさまざまな化学反応の場、いわば教養の場みたいなものが作れると面白いなという感じは文明塾に関しては持っていました。

頭と体

羽田先生のイメージは第1期の期間中も、そして文明塾1期のプログラム修了後すぐに文明塾の仲間で作った一般社団法人 本の宇宙の活動を通じて、ずっと変わりませんでした。本の宇宙は「本を通じてより良い世界を、そして誰も見たことのない新しい図書館の創造」を目指してスタートしていますが、その創立と活動を先生が応援してくださり、慶應大学の発行誌の中の対談での先生からの社団のご紹介、慶大日吉図書館での本の宇宙 協力展「読書のすゝめ! KOSMOS (本の宇宙) への旅——100のテーマ」(2012年4～5月)等へと発展していきました。

頭でっかちとは言い過ぎかもしれませんが、頭か体か? と言えば間違いなく文明塾は“頭”です。ものごとを如何に考えるかという方向に特化していますが、数少ない“体”の部分は期に1回か2回行なわれるかどうかのキャンパス外での合気道や茶道のセッションです。修了生も参加できる文明塾のその後の期で合気道のセッションに参加したときに、羽田先生の道着姿を拝見しました。その瞬間、ずっと学問の方だと思っていた羽田先生のイメージが僕の中で一新され、頭と体、文武両道の方なんだと認識を新たに、先生のイメージが大きく変わりました。

覚悟

羽田先生は阿部さんのインタビューで次のようにも語られています。

型にはまった人の育て方は基本的に好きじゃない。自分がやられたら嫌だから、やられたら嫌なことはやらないようにしようというのが、学生や生徒と付き合う時の基本のひとつです。

自分でやるという自主性をどう引き出せるかという人間関係を何とか作りたいと思います。当たり前だけど、何十人とか何百人とかの大きい教室ではすごく難しい。けれども、先ほどの言葉の話になってくるけれども、言葉が身体性を持って僕にぶつかってきたときには、僕自身もそれなりの覚悟で受け止めなきゃいけない。自分から言葉をぶつける場合も同じです。相手に覚悟を求めるような言葉ですね。そういうコミュニケーションができるような言葉を相手から引き出せるのか、また自分がどれぐらい紡ぎ出せるのか、蓄積できるのか。

文明塾の「教養」はその後の自分の活動を大幅に広げてくれました。大袈裟に言えば、「世界が変わった」と言えます。そしてその始まりのひとつは、文明塾に入るための面接にあるのですが、僕はその面接で随分と気持ちよくなり、とても楽しく自らの得意な領域についてたくさんのことを語った気がします。

それはひとえに面接官の方の力量だったと思うのですが、ずっと2名の面接官が誰だか思い出せませんでした。今回のこの原稿を書いていてふと気がつきました。あの、僕を気持ちよく喋らせてくれた面接官の1人は、きっと、いや確実に羽田先生だったんだと。僕は文明塾で知らない間に覚悟を決め、その後の人生を歩んでいるのではないかと思います。